

第66回 日本伝統工芸展 金沢展



日本工芸会保持者賞〈沈金箱「梅花空木」〉西 勝廣（石川）
—「第66回日本伝統工芸展金沢展」より—

- 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅰ【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 石川の文化財【古美術】
- 特別陳列 鈴木治男 共生の森【近現代絵画】
- 特別陳列 古九谷と加賀蒔絵の至宝【古美術】
- 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅱ【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 古い物語【近現代絵画・彫刻】
- 優品選【近現代工芸】

- 11月の企画展示室・11月の行事予定
- 企画展Topics いしかわのおもてなし

1階 企画展示室

第66回 日本伝統工芸展 金沢展

主催／石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、公益財団法人 日本工芸会
 後援／富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月25日(金)～11月4日(月・振) 会期中無休

我が国には、世界に卓絶する工芸の伝統があります。伝統は、生きて流れているもので、永遠に変わらない本質を持ちながら、一瞬もとどまることのないのが本来の姿であります。

伝統工芸は、単に古いものを模倣し、従来の技法を墨守することだけではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかりと把握し、父祖から受け継いだ優れた技術を一層錬磨するとともに、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、我々に課せられた責務であると信じます。

昭和二十五年、文化財保護法が施行され、歴史上、若しくは芸術上特に価値の高い工芸技術を、国として保護育成することになりました。その趣旨にそって、昭和二十九年以来、陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、諸工芸の七部門にわたり、日本伝統工芸展が開催されてきました。

金沢への巡回展は昭和三十八年の第十回展から始まり、以降は毎年開催されています。今回は全入選作品五七六点の内から、重要無形文化財保持者(人間国宝)や受賞者らの秀作に加え、地元北陸の作家を中心とした入選作品三四二点を展示します。

今回の石川県の入選者数は六十八名で、去年に引き続き東京をおさえて、県別入選者数で全国一位となりました。輪島の西勝廣氏が日本工芸会保持者賞を受賞した他、石川出身の鳥毛清氏が東京都知事賞、富山の般若泰樹氏が日本工芸会会長賞を受賞しました。



日本工芸会総裁賞《花文大鉢「椿」》
望月 集 (東京)



東京都知事賞《沈金飾箱「一夜」》
鳥毛 清 (東京)



日本工芸会会長賞《吹分長方盤》
般若泰樹 (富山)

◆展示作品解説

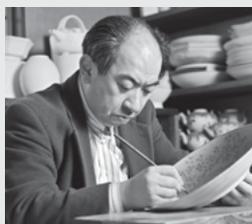
日時	11時から	13時30分から
10月26日(土)	《金工》宮園 士朗	《陶芸》米田 和
27日(日)	《金工》般若 保	
28日(月)	《漆芸》西 勝廣	《陶芸》武腰 潤
29日(火)	《染織》毎田 健治	《木竹工》川北 浩彦
30日(水)	《木竹工》細川 毅	《人形》紺谷 力
31日(木)	《染織》山下 郁子	《陶芸》田島 正仁
11月1日(金)	《染織》二塚 長生	《陶芸》中田 一於
2日(土)	《金工》魚住 為柔	《漆芸》小森 邦衛
3日(日)	《漆芸》中野 孝一	《木竹工》中嶋 武仁
4日(月・祝)	《漆芸》山岸 一男	《総合》山崎 剛 (金沢美術工芸大学長)

◆講演会

演題 色鍋島・今右衛門の伝統
 講師 今泉今右衛門氏
 (重要無形文化財(色絵磁器)保持者)

日時 十月二十七日(日)
 十三時三十分から

会場 美術館ホール(聴講無料)



◆観覧料

	個人	団体(二十名以上)
一般	七〇〇円	六〇〇円
大学生	四〇〇円	三〇〇円
高校生以下	無料	無料

※当館友の会会員と六十五歳以上は団体料金

第2展示室

石川の文化財 【古美術】

10月12日(土)～11月17日(日) 会期中無休

本県には重要文化財として建造物四十五件・八十三棟、国宝二件を含む美術工芸品八十八件が所在しています。分野別にみると、絵画九件、彫刻十七件、工芸品二十三件、書籍・典籍二十一件、古文書十件、考古資料八件という内訳です。美術工芸品の数では全国二十一位に相当し、北陸では富山の三十件、福井の八

石川県には、歴史のあるいは芸術的に優れた貴重な文化財が数多く伝えられています。これは、江戸時代に加賀藩主となった前田家の文化的施策が大きな要因の一つとなっており、その歴史的背景を基盤とするところの石川の文化風土は、芸術・文化全般に対する高い関心というかたちで今日に伝わっています。

本県には重要文化財として建造物四十五件・八十三棟、国宝二件を含む美術工芸品八十八件が所在しています。

分野別にみると、絵画九件、彫刻十七件、工芸品二十三件、書籍・典籍二十一件、古文書十件、考古資料八件という内訳です。

今回は、第1展示室の《色絵雉香炉》とあわせて白山比咩神社所蔵の《剣 銘吉光》を公開します。本県に現在二件所在する国宝を同時に見ることのできるまたとない機会となります。

十三件を上回って最大数を誇っています。建造物も十六位と上位に位置づけられます。こうした文化財が伝わる理由として、前田育徳会・尊經閣文庫が所蔵する国宝・重要文化財が九十九点にも及ぶことからわかるように、加賀藩主前田家の文化政策が大いに貢献しています。前田家が収集し、育成した数々の名品が、時代を超えて今日に引き継がれているのです。



石川県文《光明本尊》

前田育徳会尊經閣文庫分館

特別陳列

加賀藩の美術工芸Ⅰ 【古美術】

10月12日(土)～11月17日(日) 会期中無休

「加賀藩の美術工芸Ⅰ」では、加賀藩の美術工芸における「名品の収集」の側面に注目し、国宝《水左記》と、《枕草子(第一帖)》、《豊明絵草紙絵巻》、伝雪舟筆《四季花鳥図》(三点いずれも重文)を展示しています。そこで今回は、前号で十分に紹介できなかった《枕草子》に紙幅を割きたいと思います。現在展示中の《枕草子》は、現存する清少納言の随筆『枕草子』の写本の中で、最も古いものと考えられています。附属する古筆了祐の極札によれば、筆者は鎌倉時代の公卿・歌人二条為氏とされており、また明治時代に行われた全国宝物取調掛の鑑定では、藤原定家の娘民部卿局が筆者とされました。しかし、いずれも確証に欠けることから、現在は鎌倉時代中期の二条家流の名

筆による書写と位置付けられています。本作は四帖からなり、各帖の表紙に外題はなく、綴葉装てつちようさうで本文料紙は斐紙を使用し、半葉に九行、和漢混淆で書写されています。第一帖は「はるはあけほの」、第二帖は「めてたき物」、第三帖は「正月一日」、第四帖は「小白河といふ」から始まります。前田家に入った経緯は不明ですが、『寛永六年御成之記』には、四代藩主・前田光高が元服した寛永六年(一六二九)四月二十六日に將軍徳川家光が、同二十九日には大御所徳川秀忠が前田家の本郷邸に御成を行い、その際に座敷二階の書院の左下の棚に「蒔絵梨子地箱」に入った「清少納言枕草子」が飾られたことが伝えられています。

重文《枕草子(第一帖)》(部分)

第2展示室

特別陳列

古九谷と加賀蒔絵の至宝

一百万石大名の自負一

11月22日(金)~12月22日(日) 会期中無休

加賀藩主・前田家の文化振興政策は、江戸幕府に対する独自の表明という戦略的な側面を持っています。特に三代藩主・利常は、京都や江戸から名工を招聘して意欲的な制作を奨励するとともに、新たな美術ジャンルとして誕生した色絵磁器にもいち早く着目し、生産プロジェクトを強力に推進しました。

本展は、東京国立近代美術館工芸館の移転を来年に控え、工芸を核とした地域における文化振興のモデルケースとして、日本のみならず世界からも注目が高い古九谷と加賀蒔絵に改めてスポットを当てます。そして、歴史的な名品の展示をとおして工芸史に銘記されるような独自の様式を創出した藩主と作家の高い美意識と、高度な技術をもってその美意識に添う作品を生み出した加賀藩の制作体制を再認識

するものです。

展示作品は館蔵品、寄託品を主体としますが、もちろん今回も、ご所蔵者のご厚意により重要文化財《秋野蒔絵硯箱》(五十嵐道甫作)が、道甫の基準作として展示されます。そして是非注目いただきたいのは、古九谷では《色絵畦道図角皿》が旧館以来四十七年ぶりに、また加賀蒔絵では、大本山法華経寺ご所蔵の《蓮唐草鳳凰蒔絵聖教箱》と《蓮池蒔絵聖教箱》(いずれも重要文化財《日蓮上人自筆遺文》収納箱)が三十二年ぶりに公開されることです。

古九谷と加賀蒔絵の精華として広く知られたこれらの名品が、初めて同時に展示される貴重な機会をとおして、藩主が並々ならぬ自負をもって取り組んだ文化政策の真髄にふれていただきたいと思います。



《蓮唐草鳳凰蒔絵聖教箱》大本山法華経寺蔵

第4展示室

特別陳列

鈴木治男 共生の森

【近現代絵画】

10月12日(土)~11月17日(日) 会期中無休

本展は鈴木治男の画業を修行期、模索期、画風確立期、現実反応期、共生の森シリーズ、リセット期、水の記憶シリーズの七期に区分し紹介しています。修行期は《自画像》(昭和四十八年)を描いた時期で、鈴木は金沢美術工芸大学の学生で、スケッチブック片手に能登の風景や美恵夫人を描いていたと言います。模索期には私学在外研修員としてメキシコへ行き、街中の様々な物をスケッチしています。

画風確立期・現実反応期の作品は、実際に鈴木が見聞したことから描かれています。《広場の孤独》(平成二年)はマドリッドでバスケットと出会ったことがきっかけとなっています。この時期の作品は、後の共生の森シリーズのような色彩豊かな画面構成が特徴的です。

アトリエを構える高台周辺の森に住む動植物を描く共生の森シリーズを描いているさなか、東日本大震災が起きました。鈴木は震災の映像を前に何も描くことができなくなったと語っています。また、平成二十五年にはパーキンソン病を発症しましたが、画材や技法を変えながら現在まで絵を描き続けています。リセット期を挟み、二十六年から水の記憶シリーズが始まります。このシリーズは油絵の具だけでなく、墨も使って思いのままに描く大胆な作風であるとともに、強いメッセージ性が込められている作品です。

鈴木は絵画は抽象的な作風ですが、モチーフはすべて具体的なイメージから描かれています。どんなことが描かれているのか、じっくり鑑賞する楽しさがあります。



鈴木治男《共生の森から》

学芸員の眼

本欄では、改めて《巖浪蒔絵真鳥羽箆筒》を紹介します。真鳥羽とは鷺の羽を指し、内部には五代藩主前田綱紀が自ら選定し分類した、矢羽根に用いる鷺の羽が桐製の四段重の箱にはいつて納められています。前田家は、貴重な書物を入手した際に、名工に漆芸の技巧を駆使した収納箱を作らせていますが、本作は、収納するものが鷺の羽であることが注目されます。そこには、加賀藩五代藩主・前田綱紀の博物学的関心の高さと、自然界に存在するものに対する敬意が感じられます。箆筒の外側は全体を黒漆塗として、正面に金の平蒔絵で「真鳥羽」の題字を記し、扉から側板、背面にかけて各種の蒔絵、螺鈿、截金を駆使して岩に打ち寄せる波を力強く表現しています。岩の研出蒔絵による量感や、金銀の付描による波の輪郭や水流、飛沫の躍動感の表現は、加賀蒔絵の伝世品の中でも屈指の完成度を誇っています。

今回は国宝《北山抄》(巻第三)と、重文《源氏物語(花散里)》、重文《小さ刀拵》をはじめ、第二展示室で開催される特別陳列「古九谷と加賀蒔絵―百万石大名の自負」に関連して、清水九兵衛の代表作《巖浪蒔絵真鳥羽箆筒》と、九兵衛最晩年の作とされる《老松蒔絵硯箱》が展示されます。

《北山抄》は、平安時代中期の重要な有職故実書で、年中要抄、拾遺雜抄、踐祚抄、備忘、都省雜事、大將儀、羽林要抄、吏途指南の八編・十巻から成ります。本来は、各編とも藤原教通や藤原道長、あるいは自分の子息の参考のために単独で書かれたものを、後に集成したものと考えられています。著者は藤原公任(九六六―一〇四一)で、成立は一〇二二年―一〇二〇年頃

とされています。今回は巻第三(甲)・拾遺雜抄・上が展示されます。

藤原公任は平安時代中期の公卿、歌人で、漢詩、管弦にもすぐれ、藤原道長が大堰川に漢詩、和歌、管絃の三船を浮かべ、その得意とするところによって人々を乗船させた時、公任はどの船に乗るのだろうかと言わせたという(三舟の才)でも知られています。『三十六人撰』『和漢朗詠集』を編集し、歌論書『新撰髓脳』は後世に大きな影響を与えました。書名の『北山抄』は、公任が晩年隠棲した京都・北山の地名によるもので、『北山納言記』『北山記』などとも言われ、また公任が四条大納言と称されたことより『四条大納言記』とも呼ばれます。

第5展示室

東京国立近代美術館 工芸館名品展

11月22日(金)~12月22日(日) 会期中無休

現在、東京都千代田区北の丸公園にある東京国立近代美術館工芸館は、一九七七年に東京国立近代美術館の分館として開館し、日本の工芸の歴史を語るうえで欠かせない美術工芸作品を保存・収集してきました。

その国立工芸館は、国の地方創生施策の一環である政府関係機関の地方移転として、二〇二〇年に、石川県へ移転します。そこで、工芸館のコレクションをより多くの方にご覧いただくため、石川県立美術館では二〇一六年から東京国立近代美術館工芸館名品展を開催してきました。

本年は、「漆・木・竹工芸のみかた」と題し、漆工、木工、竹工の分野の作品をご紹介します。移転まで一年を切り、当館では最後の名品展となります。

第3展示室

古い物語 【近現代絵画・彫刻】

11月22日(金)~12月22日(日) 会期中無休

古今東西、若くみずみずしい生命力にあふれた男女の姿態は、それだけで見る者を魅了し、数多の美術作品のモチーフとなってきました。また近世日本の花鳥画においても、たとえば稚松と旭日と一緒に描き、弥栄(いやさか)のイメージとして繁栄を願うなど、若さをプラスのイメージとして捉えてきたことは事実です。しかし「老松」や「椿壽」などが長命や永遠の繁栄を意味し、その願いを込めて用いられてきたこともまた事実。つるりとした皺やシミのない顔にはない、重ねた年輪にこそ浮かび出る深い味わいがあるというものです。今回の特集展示では、そのような作品個々にある「古い物語」をテーマに、絵画・彫刻作品をご覧ください。

油彩画では、モデルとなった個々の人物から放たれるパーソナルな魅力を感じ取ってください。また小テーマを設けての比較展示もお楽しみいただけます。日本画では動植物や、風景からも古いの味わいを感じ取っていただける展示を考えています。そして彫刻作品では、古いを造形的な視点から味わうことができるでしょう。各分野の作品詳細については次号で紹介いたします。いま日本は六十五歳以上が、全人口の二十八・四%を占める「世界一の長寿大国」となりました。文筆家・前衛芸術家の赤瀬川原平が『老人力』を上梓して二十余年。「古い」の持つ魅力を再認識する展示となれば幸いです。



伊東深水《醉燕台翁》

第6展示室

優品選【近現代工芸】

10月12日(土)~21日(月) 会期中無休

第六展示室では、北陸ゆかりの名工たちによる近代工芸の名品を紹介します。鍛鉄の山田宗美による《鉄打出狛犬大置物》や九谷庄三《色絵金彩八仙人花鳥図大花瓶》など、技巧を凝らした明治の工芸をはじめ、大場松魚《平文円舞の箱》、寺井直次《蒔絵箱「鳴き渡る」》、三代徳田八十吉《彩釉鉢》といった昭和、平成を通して活躍した人間国宝の、代表作をご覧ください。また茶道と工芸家の深い結びつきを表す展示として、氷見晃堂の《桑造櫛形風炉先》、初代魚住為楽による珍しい《竹茶杓》に、奥出寿泉の《乾漆菊形茶入》を合わせます。突き当りの壁面を、木村雨山による日本画の大作《牡丹》が彩ります。北陸の豊かな文化を感じていただければ幸いです。

第7・8・9展示室

第65回記念

一陽会金沢展

11月21日(木)～25日(月) 会期中無休

今秋、東京六本木の国立新美術館で開催された第六十五回記念一陽展(十月二日～十四日)に出品しました絵画・彫刻・版画の招待作品約五十九点、支部作品三十点を展示いたします。金沢での巡回展の開催は五年ぶりとなります。

一陽会は「清新にして深奥なるものの創造なるもの創造に勉勵し、新時代の美術を推薦とする。尖鋭なる未完成こそ推薦し、前人未到の新分野の確立に努力するものである」この精神をふまえ、日々研鑽努力してきた渾身作を展示いたします。美術愛好家の方々にご高覧いただいで、ご教示いただければ幸いです。

◇入場料／一般・五〇〇円、団体・三〇〇円、大学生以下・無料

◇連絡先／一陽会石川支部副支部長 竹田明男
電話：〇七六一二四八―五八八九

第7・8・9展示室

第30回

石川県水墨画協会公募展

11月7日(木)～11日(月) 会期中無休

石川県水墨画協会は、今回第三十回記念展を開催することとなりました。公募展は過去の制作活動の実績に照らし承認された会員の研鑽成果発表の場であると同時に広く県内から一般公募し、厳正な審査で選ばれた入選作を展示しております。同展は会員及び一般公募の意欲的な作品を鑑賞いただくと同時に、節目の三十回の記念企画として水墨画体験ワークショップ、選拔展「和と水墨画の世界」、また指定役員による石川の景色を描く等、より見どころの多い公募展となっております。是非、白と黒で表現された水墨画の魅力をつぶり楽しみながら作品をご覧ください。

多くの方々のご来場をお待ちしております。

◇入場無料

◇連絡先／石川県水墨画協会事務局長 村田栄子
電話：〇七六一二九一―四六八八

十一月の行事予定

■土曜講座	13時30分～15時	美術館講義室	無料
9日(土)	「能楽」をつくった加賀藩主 13代前田斉泰(上)	学芸専門員 村上尚子	
16日(土)	「美濃窯発掘史」 ～魯山人らの活躍を中心に～	学芸員 奈良竜一	
■映像ギャラリー	13時30分～15時	美術館ホール	無料
10日(日)	「シリーズ 北陸の工芸作家 石川の巧たち」 「国宝 春日大社 熊野速玉大社」(31分)	人間国宝 魚住為楽(42分)	

一般社団法人示現会は、本年四月、東京都港区六本木の国立新美術館にて第七十二回示現会展を開催しました。巡回金沢展では、本部基本作品六十点(受賞作品を含む)と地元石川県支部作品二十五点、合計八十五点を展示いたします。

示現会は堅実中正、清新な具象絵画を目指して、昭和二十二年石川寅二を中心に創立以来、(故)大内田茂士、(故)檜原健三の両芸術院会員を輩出しています。

一般社団法人示現会石川支部は、平成二十一年に設立され、多くの方々のご理解と支援のもとに、翌二十二年より巡回金沢展を開催しています。

◇入場料／一般・五〇〇円(十名以上の団体四〇〇円) 六十五歳以上・四〇〇円、大高生・三〇〇円 ※身障者手帳をお持ちの方(付添者含む)、中学生以下・無料

◇連絡先／一般社団法人示現会石川支部事務局 南外志雄
電話：〇九〇一六八一―〇四三六

第7・8・9展示室

第72回

示現会展巡回金沢展

11月14日(木)～18日(月) 会期中無休

会期: 令和2年1月4日(土)~2月11日(火・祝) 会期中無休



県文《四季耕作図》久隅守景



県文《秋草図》喜多川相説



久保田米儒《大橋公・義貞公誠忠之図》



次回の展覧会

令和元年11月22日(金)
~12月22日(日)
会期中無休

前田育徳会
尊経閣文庫分館

加賀藩の美術工芸Ⅱ

第2展示室

古九谷と
加賀蒔絵の至宝

第3・4展示室

古い物語
【近現代絵画・彫刻】

第5展示室

東京国立近代美術館
工芸館名品展

第6展示室

優品選
【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

11月4日は第1月曜日より

コレクション展示室無料の日

11月の開館時間

午前9:30~午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00~午後7:00 年中無休

11月の休館日は
19日(火)・20日(水)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎ 092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第433号(毎月発行)
2019年11月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。